

ネオン街記者も 銀座の 『姫』 にはビビった!

岩本 隼、國安 輪 共著

# 銀座の女、 銀座の客

週刊新潮  
『CLUB』通信部発



を読む

刻々と時間が流れても、その時間が消えてなくなることはありません。時間は流れ去った瞬間から「歴史」として残ります。問題はその後です。つまり、その「歴史」がどう評価されるかです。その評価によつて「歴史」を作ってきたものの存在価値が左右されるのですから大変なことです。

さて、今年3月、創刊45周年を迎えた週刊誌があります。45年の歴史を積み重ねてきたわけですから、その始まりは簡単な引き算で昭和31年ということがわかります。

当時、週刊誌は内容の中心がニュース物であるところから発行元は新聞社でなければ無理、とされていきました。その常識にあえて挑戦したのが芸芸物出版の雄であった新潮社でした。その週刊誌名はズバリ社名を名乗った『週刊新潮』。谷内六郎の叙情画を表紙に使用し、売り物はお得意の芸芸物出版社の特技を生かした谷崎潤一郎、大佛次郎、五味康祐の連載小説三本立てで、2月19日、定価30円で全国一斉に発売されました。物珍しさはあったものの、所詮こんなものかという評判でしたが、ここにツヨイ味方が登場します。5月9日号から連載開始の柴田錬三郎作「眠狂四郎無頼控」がそれで、『週刊新潮』の部数を伸ばす原動力になり、新聞社系週刊誌にはない内容を持ったメディアとしての地歩を固めました。

同誌の45周年記念号は通巻2291号に当たる3月9日号。グラビアは「本誌

45年のグラビア」と題した全20ページの大特集。トップの写真は創刊年の31年に芥川賞を受賞した当時の慎太郎刈りの石原東京都知事。中にドラマ「女徳」の入浴シーンで豊富なセミヌードシーンを見せる扇 千景大臣の若き日の写真があるのはサービスか。記事では『週刊新潮45年を飾った画期的記事の登場人物』なる6ページの特集。タイトル脇には創刊号の表紙写真を入れたりしてオメデタムード。記事はこんな書き出しです。

《昭和33年8月12日、『週刊新潮』の編集方針に一石を投じることになる航空機事故が発生した。羽田発名古屋行の全日空「5045便」が下田沖の海上で墜落し、33人全員が死亡したのである。

この事故がなぜ雑誌の編集方針と関係があるのか——亡くなった33の霊に哀悼の意を捧げつつ、43年前を振り返ることから始めてみたい。》

事故の一報が流れたのは夜。会社に居残っていた新人記者後藤章夫(故人)はすぐに羽田空港に向かうが、搭乗者リストは新聞記者たちに持ち去られ残っていない。ぼう然とロビーに立ちつくす後藤に、職員が別のリストを差し出した。

手渡されたのはキャンセル客のリストだった。それを持ち帰ると、編集長は大喜びし、取材が始まった。

なぜその人たちは飛行機に乗らなかったのか。美容院でのセットがうまく行かずにキャンセルした主婦の話など生と死のカードのうち、生のカードを引いた人

たちのそれぞれの事情がわかり、記事にはこんなタイトルがついた。

『私は死神から逃れた 7時35分をめぐる運命の人々』(昭和33年9月1日号) それは画期的な視点と取材で社会にインパクトを与え、以後、それが『週刊新潮』の特色となるのです。

\* \* \* \* \*

昭和51年(1976年)1月『週刊新潮』にまさに週刊新潮ならではの新しい企画が誕生しました。それがこれからご紹介する「CLUB」と題する見開き2ページの読み物です。一口で言ってしまうば、酒の場における女と男の姿を通して、人間の赤裸々な姿を写し取るうという企画でした。

その取材記者、本人たちに言わせればネオン街記者に指名されたのが当時35歳の岩本準と34歳の國安輪の二人でした。企画、取材、記事作成をまかされたわけです。

斯くして新企画「CLUB」はスタートしました。始めてみると、これがなかなか評判がいいのです。評判がいいというのが取材者にとつては何よりの励みです。斯くして二人の足は、北は稚内から南は石垣島まで、店は銀座の「姫」などの超一流のクラブから、スナック、キャバレー、ディスコから、ピンサロ、ソープ(当時はトルコと呼んだ)、ファッションヘルス、ホテル、テレクラといまでいう風俗の世界に首を突込み、かと思えば京都祇園を始めとする花柳界にも顔をだし、ひたすら紅灯の巷を駆け回ったのです。その結

果平成9年(1997年)8月にこの欄が終わるまで通算1076回の長期連載となりました。

その取材裏話をまとめたのが「銀座の女、銀座の客」週刊新潮「CLUB」通信部発「岩本準、國安輪共著、新潮社刊、1500円・税別)です。さあ、その一部を読んでみましょう。

\* \* \* \* \*

まずは銀座へ。《略実をいうと、心細い限りだった。ぼくらは銀座のネオン街をまったく知らなかったからだ。

二人とも東京育ちで、大学も東京、お互いに幾つか職を転々として、週刊誌の仕事もずでにしていたから、東京を知らないわけではなかったが、銀座となるとねえ……。家で飲むときはニツカの750円のノースランド。外で飲むといつても、もつぱら新宿の2丁目かゴールデン街である。銀座で出入りしたことのある店といったら、3軒のデパートのほかは、文房具の伊東屋、レコードのヤマハ、洋書のイエナ、食堂なら三笠会館、飲み屋ではビアホールのライオンぐらいがせいぜい。ま、言うてみれば二人とも貧乏書生で、30過ぎても遊びではえらく奥手だったわけだ。

会社のある神楽坂から地下鉄を乗り継いで新橋の街に降り立つたばかりは、新橋駅を背に、東の空を眺めて途方に暮れた。目の前には銀行が建ち並び、その向こうには高速道路が走っているが、はて、名だたる銀座クラブ街とは、一体奈辺に

存在するののか。

「右か左か、はたまた裏か。考えていてもしようがない。誰かに聞くでしょう。(略)折から、会社の退けどき。新橋駅に向かつて大勢の人が歩いてくる。遊び慣れているので人の良さをうな紳士に目をつけて、近づいた。」

「あの、すみません。銀座って、どこでしょう？」

「は？」

「銀座のクラブ街って、どこいらへんにあるんでしょうか？」

銀座のメガネをかけた紳士は、安背広に薄つぺらなコートを引っかけたばかりの風体を一瞥してから、田舎から出てきたばかりの純朴な青年たちを励ますような笑みをうかべて

「あ、銀座ね」

と首をめぐらせ、指さした。

「あの高速道路の向こう側の一角が、いわゆるクラブ街ですがね」

電通通り(外堀通り)と銀座通り(中央通り)と晴海通りに囲まれた一角、もう少し広く見るなら、銀座通りと首都高8号線に囲まれた一角にひしめて、煌々と夜を照らす何軒というクラブ、バー、スナック。寿司屋、レストラン、ソバ屋、小料理屋。後に20年間通うことになるこの遊興の巷を、ぼくらは、こうして初めて知ったのだ。(I)

ちよつと心細い銀座デビューのネオン街記者でしたが、基本的には「習うより慣れる」で、心強い協力者が登場したり、そ



れなりに慣れたりで、二人は徐々に銀座、そしてクラブ等に溶け込んでいくのです。なお、引用文の末尾に括弧でくくった「I」と「K」のアルファベットは、そのパートの記述を担当した岩本氏と國安氏の目印です。

銀座に精通してきた二人は、自分たちの仕事である「CLUB」欄の取材、原稿づくりのほかに、その知識を駆使して「新潮社」のためにも働くのです。

《週刊新潮誌上でかつて連載していた『黒革の手帖』という小説を覚えておられるだろうか。そう、松本清張さんの執筆によるもので、主人公は政治家の愛人となつた銀座のホステスである。が、さし

の清張さんも銀座のホステスの生感というか、実際の姿の有り様にはあまり詳しくなかつたらしいのである。そこで、当時の連載小説担当者を通じて「誰かそのへんを案内してくれる人物はいないか」という相談があつたのだ。

「先生が週刊新潮の『CLUB』欄の愛読者でね、いつも楽しみにしていると聞いていますよ」

抜け目のない担当者は、そう付け加えることも忘れなかつた。ぼくが、即座にこの話に応じてしまったのは言うまでもない。「うーん、そりゃあね。やつぱり、『ロイヤルサルーン』の吉沢さん(ネオン街記者がお世話になる銀座の生き字引のような人)が一番だよ」

その時、間髪を入れずに彼を推薦したぼくの判断は間違っていなかつた。吉沢さんが松本清張先生に紹介した銀座ネオン街、銀座のホステスたち……その実態は、小説の主人公を通じて週刊新潮誌上で生き生きと描かれ、ぼくも随分と面目を施したものである。

「いやあ、クニさん。松本先生はあのお顔に似合わず、本当に若い女の子におやさしい人なんで、案内して実面に面白かつたよ」

さり気なく、遠慮のない言葉で語る吉沢さんは、やつぱりぼくらの銀座指南役だつた。(K)

このあたり、ネオン街記者の面目躍如たるものがありますが、彼らにとつて、銀座のクラブの代名詞でもあり、全国のク

# 銀座の女、 銀座の客 を読む

ラブの頂点と見られた山口洋子さんの『姫』はいかなるものだったのでしょうか。《銀座新人のぼくらにとつては、これら名門店のドアを開けるのは、かなり度胸のいることだった。

特にビビットのが『姫』である。

なにしろ、当時は全国津々浦々のネオン街で、一番多い酒場の名前が『姫』だと言われたくらい、知名度バツグンのクラブだった。

(略)編集部はぼくらに、

「私は北海道の人間ですが」と、初老とおぼしき男性の声で電話がかかってきたことがあった。

「おたくのクラブ欄を読んで、死ぬまでに一度『姫』というクラブに行つてみたいと思つているのですが、客で入れてもらえるでしょうか。いえ、お金はあります。30万円用意しているのですが……」

「それだけあれば十分でしょう」「でも、イチゲンで入れてもらえるでしょうか」

「まあ、タテマエはイチゲンはお断りということになっていますが、きちんとした身なりで行けば、大丈夫だと思います」「女房も連れていきたいのですが」「それなら、なおさら大丈夫でしょう」

ことほど左様に、銀座の『姫』は憧れのクラブ、敷居の高い店だったのである。

電通通り沿いの銀座七丁目、当時は隆盛を誇つていた君島一郎のブティックの2階に上がっていくと、ドアを開けるまでもなく、

「いらつしやいませ」と黒服たちが懇懇に迎えるが、その目は「こいつ、何物だ」

と値踏みしているのがよくわかる。しかも、中には、さんざめく絶世の美女たち。いやはや、その威圧感ときたら！アインシュタインではないが、空間が歪んでいるという感覚である。

それから何年もたつて、ぼくらがイッパシの『姫』の客で通るようになってから、赤坂でかなりエグい商売をやっている不動産屋を『姫』で接待したことがあったが、海千山千のはずのその男が身体をシャッチョコバラせ、まるで幼稚園児のようにソファに納まっている図は、見てて可哀想なくらいであった。それくらい、独特の濃厚な雰囲気か漂っている空間なのだった。(I)

20年を越えるネオン街記者の思い出はいくら書いても尽きることはありませんが、二人はこの期間、ただ一つ守りとおしたことがあり、それによって顔を出す先々で信用されました。その信用は二人の大きな勲章でした。

《ところで”どんな高級店だろうと、まづ客で入る”というぼくらの取材戦略を裏打ちしてくれていたのは、豊富な資金

力だった。

「不思議だったのは、あんたたちは取材に来て帰るときに、必ず飲み代を払っていったこと。”うちは現金はいただきませんから、請求書を送ります”というところを出して”ここに送つて。タダ酒飲むと、ぼくら会社を首になるから必ず送つてよ”と念押しして伝票にサインしていったでしょ。あれは本当に驚いた。当時のマスコミの人間が銀座で取材するときには”御馳走さま”で済ませる人種ばかりで、その代り、悪口も書かなかつた。が、あんたたちだけは違つていたね」

と、後に親しくなつた銀座のマネージャーに言われたことがあったが、これはぼくらの手柄ではなく、いつも膨大な取材費に頭を痛めつづけてきたであろう歴代編集長たちのおかげである。(K)

(三浦喜一)

